

第
六
卷

天

界

大
正
十
五
年
一
月
號

第 六 十 號

— 一九二六年を迎えて —

海外にはケンブリヂ會議やグリーン井チ天文臺の創立二百五十年祭、國內には我が大學天文臺の新建築新設備、もつこ内部には本會創立五周年の催し、更に又、天界には畫家座新星や十數個の彗星出現があつて、多忙を極めた一九二五年を茲に送り、今や新しき一九二六年を迎えるこゝなつた。

今年初頭の天文事件は、言ふまでもなく、一月十四日に南洋スマトラ島の南部で起る**皆既日食**である。皆既線はアフリカ大陸の奥地に發して、赤道に近い英領地から印度洋に入り、可なり永い時間を洋上に費して後、スマトラ、ボルネオ、ミンダナオの島々を通過して、我が委任統治範圍のマリアナ群島沖で消えるのであるが、觀測地の事情から言へばスマトラが最も好適であるから、オランダ、フランス、英國、米國から遠征する學者たちは皆此の地に集まる筈である。此等の文明國と比べれば我が日本は最近距離にありながら、官民の間には遠征計畫の無いのは遺憾である。

今年の末に近く、天文學界を賑はすものは、また、**火星の接近**であらう。但し今度の衝は十一月初めであつて、地球からの距離は一昨年の時ほど近くは無いけれど、やはり視直徑は二十秒を超え、殊に星の赤緯が高いために、北半球の觀測者に特別な便宜があり、かた々々、今一度、火星の新研究が各所で行はれるであらう。

今年内に近日點へ歸來する**彗星**はコブ、フィンレー、ホームズ、ジャコビニの四つであつて、昨年ほどは多くない。しかし最近、露獨兩國天文臺の活躍により新彗星の發見も頻繁になつた傾きが明らかであるから、今年も此の方面にかなりの收穫は豫期し得られる。

昨年以來、**太陽の黒點活動**は益々旺盛であるが、今年は一層活躍が甚だしい筈である。昨年既に米國では異常なオーロラが數回觀察されたが、今年は北日本の注意深い觀察者にも同様な現象が見えるかも知れない。わが「天界」も此の一年は太陽研究のために特別な努力を拂ふつもりである。因みに、今年は太陽に縁の深いフラウンホーファの死忌、シザーベの黒點觀測開始忌、カリントンの誕生忌から恰も一百年目である。

今秋、我國に開かれる**汎太平洋學術會議**も亦東洋方面の天文學界に何等かの交渉を持つて好い筈である。(山本)